

7 章 2017 年度 COC 事業広報関連資料

COC 事業ニュースレター2017 年秋号

COC 事業ニュースレター2018 年春・最終号



市看×いちかん ちいき通信

2017年 秋号

2017年9月10日 発行

いちかん…神戸市看護大学の略称「市看」

「(い)っしょに(ち)いきづくりについて(かん)がえる」をコンセプトにしています。

今号の内容



- P1 ・地域を耕す
・COCコラボ教育ピックアップ
- P2～3 COCフォーラム
・地域の顔
(須磨区横尾児童館館長
田中準三さん)
- ・地域づくり・健康づくり
(訪問看護・リハステーションラヴィー副所長
中村竹男さん)
- ・コラボ教育での学び
(多職種連携
地域連携を学ぶ)
- ・COC研究ひろば 第9回
(地域・在宅看護学
都筑千景)
- P4 活動予定

地域を耕す

神戸市看護大学 地域・在宅看護学分野 教授 片倉直子

精神科医の中井久夫先生は、著書『こんなとき私はどうしてきたか』(2007年、医学書院)の中で、次のように言っています。

「病院で患者さんのそばを通り過ぎるときにも、頭を軽く下げて挨拶するということが大事だと思います。われわれは「仕事を急いでいます」とばかりに患者さんのそばをピャーッと通り過ぎがちなのですが、あれは患者さんから見たらさぞ「自閉的」に見えるでしょうね。あるいは「おまえはカウントしない(数のうちに入っていない)」と。」(p.74)

中井先生は、病院の廊下を行ったり来たりして、出会う患者さんに挨拶することを「荒地地に鋤を入れるように病棟を耕しているようなもの」と言っています。そのうちに何かが変わってくるかも。具体的にケアをしているわ

けではありませんが、すれ違う時に挨拶するだけで、眼中にあることを相手に伝えることができるのでしょうか。そうであれば、医療者のする会釈や挨拶は、礼儀のみならず、患者への関心を無言で伝えることのできるコミュニケーションツールになり得るでしょう。

中井先生は病院のことをあげていましたが、これを生活圏に広げていったらどうでしょうか。ひとりひとりの医療者が意識的にすれ違う人たちに会釈をしていけたら、このコミュニケーションがその地域にすむ人々の気持ちを耕すことになるのではないのでしょうか。訪問看護師だった私は、学園都市駅から大学まで歩く時、最近、すれ違う人に、ちょっと恥ずかしいですが会釈をするように心がけているところです。

COCコラボ教育ピックアップ ～2017年春から夏「基礎看護技術演習Ⅲ、健康行動論」～

全卒業生が地域住民の健康と暮らしを理解し、より健康となるための支援について考えられるよう、COC事業では1～4年の全学年において地域連携教育を展開しています。これまでは各学年で演習を実施していましたが、今年度は健康づくりにむけた支援方法をより理解できるよう、住民の健康アセスメントを行う2年生の「基礎看護学技術演習Ⅲ」と、健康相談・保健指導の一連を学ぶ4年生の「健康行動論」の演習を合同で行いました。演習は2年生が測定した血圧や栄養状態のアセスメントシートをもとに、4年生が健康相談を行うものです。初めて住民を対象に血圧を測定する2年生が、途中4年生の手を借りて測定、住民への説明を行う場面もありました。学年が混合で演習を行なう機会が少ない中、学生にとってはこれまで学んだ知識や技術を振り返るよい機会になったのではないかと思います。

(神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター准教授 相原洋子)

地域の顔

～子どもたちの居場所“児童館”に看護学生が参加すること～

須磨区横尾児童館 館長 田中準三さん

昨年から、菅の台児童館の館長（平成27年当時※）からの紹介を受け、看護学生が夏季期間に横尾児童館に来てくれています。昨年は2人（本館と若草児童館）、今年は3人の学生を本館ほか、落合、妙法寺児童館でそれぞれパートとして受け入れることになりました。横尾児童館は私が着任した3年前は25人の児童が登録していましたが年々数が増え、今年は47人が登録しています。学年がそれまでの1～3年生のみから、6年生まで受け入れ可能としたことが関係しているからかもしれません。夏休み期間は朝からお弁当を持った大勢の子どもが来館するのでとてもにぎやかになります。この期間に学生さんに来ていただき大変助かっていますし、何より若い学生さんが来てくれることで、子ども達の目の輝きが違うというもあります。



横尾児童館の館内の様子

児童館では学年を超えた子ども達が集っており、縦の関係をつくる貴重な場となっています。小学校で教員をしていた当時は「開かれた学校」として、学校が放課後も子ども達の集いの場となることを目指していましたが、子どもを巻き込んだ事件などで環境が大きく変わり、児童館は今、子ども達にとって地域の大切な“居場所”となっています。

看護学生の受け入れはつい最近からですが、ぜひこの機会に児童館に集う多様な性格をもった子ども達の姿をみて、将来の看護に活かしていただければと思います。また子ども達との関わりの中で、例えば夏場の熱中症予防に水分をこまめにとるよう気をつけるなど、ちょっとした健康の視点を持って接してもらえると嬉しく思います。

※平成27年度健康生活支援学実習で、菅の台児童館館長とお話する機会があり、本学学生のパートのお話をいただくようになりました。

（聞き手 地域連携教育・研究センター准教授 相原洋子）

地域づくり・健康づくり

～理学療法士が担う地域の活動紹介～

訪問看護・リハステーションラヴィー 副所長 中村竹男さん

神戸市西区では、2年前より5事業所の理学療法士、社会福祉協議会、あんしんすこやかセンターの協働により、コミュニティサポート育成事業の一環として地域住民による介護予防教室が支援を受けています。

元来、理学療法士は、ケガや病気からの身体機能の回復や症状の悪化予防のために、病院で患者さんを支援する役割でした。しかし、健康寿命の延伸のためには元気な時からのアプローチが重要であること、ある地域住民から「ふれあい喫茶」でお茶のみ会をしており、それなりのつながりはできてきたが、さらに身体によいことをしたい」という相談が、あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）に入ったことがきっかけで、地域において介護予防教室が始まったそうです。現在では、区内で16グループが立ち上がり、自主的に活動されています。中村さんは理学療法士として、効果的で適切な運動に対する助言や健康に関する知識を提供なさっています。参加している地域住民にとってこの教室は、健康づくりの他に情報交換、互いの安否確認の場としても利用されているそうです。また、この教室を始めたことで、理学療法士やあんしんすこやかセンターの認知も高まり、相談件数が増えたことで早期介入がしやすくなってきたという手ごたえも感じておられました。今後は、立ち上がったグループが継続できるための支援が必要であり、そのためにも地域、医療、福祉のネットワークづくりが重要だと爽やかな笑顔で語っておられました。

（聞き手 地域連携教育・研究センター助教 小巻京子）



体操後のインタビューの様子
中村氏と学生

コラボ教育での学び

～多職種連携・地域連携を学ぶ：看護学ゼミナールの紹介～

2010年、世界保健機関より医療ニーズの多様化などを背景に、「専門職連携と医療協働の行動枠組み」が提案されました。すべての人々が健康になるためには、異なる専門分野の医療従事者の連携が重要とされています。本学は単科大学ということもあり、他の医療福祉系の学部の学生と交流する機会がありません。そこで4年生選択の看護学ゼミナール（通年、1単位）に、COC分野として「多職種連携・地域連携教育ゼミ」を設けました。今年度は17人の学生が履修しています。ゼミの活動内容は、市民や他大学他学部の学生との交流、看護職以外の医療専門職の活動場所への訪問などです。

これまでに行われた活動は、あざみ祭（学園祭）での一般の方へのCOC事業コラボ教育の紹介、須磨区まちづくり課の企画「須磨の見どころをSNSを通じて紹介」への参加です。また8月、9月には地域における専門職間連携を考える一助となるよう、理学療法士の地域活動に参加する機会を設けています。また10月14日に開催するCOC+事業連携大学（神戸市看護大学、神戸大学、園田学園女子大学）の報告会「COC+3大学合同報告会プラットフォーム」では、学生が中心となり報告会の企画や発表の準備を進めています。合同報告会では、17人の学生が口頭とポスターで「地域活動で学んだこと」「地域活動での学びを実習でどう活かしたか」について、発表する予定です。他大学、他学部の学生との交流を通して、共に学び合い、これから求められる連携のあり方を考えるよい機会になることを期待しています。合同報告会の開催内容については、本紙4ページの活動予定に掲載しています。（ゼミ担当教員 相原洋子・記）



合同報告会の企画についての
大学間会議の様子

COC 研究ひろば 第9回

～地域診断を反映させた地域活動実践システムの評価と精錬化～

神戸市看護大学 地域・在宅看護学分野 教授 都筑千景

神戸市のあんしんすこやかセンターでは、高齢者が住み慣れた地域で自分らしく暮らしていけるよう地域特性をふまえた取り組みを行っています。この地域を的確に捉えるためのひとつの方法として、地域診断があります。地域診断は、地域のさまざまな情報を分析し、地域特性や課題、強みを把握してその地域に応じた支援策を計画、実施、評価していく一連のプロセスです。神戸市では平成24年度から3年間、全センターに対して基礎研修を実施し、昨年度から応用研修も行って、センターの機能強化に努めています。

本研究は研修開始当初より、この研修を経てセンターがどのように変わったのかを評価し、より効果的なセンター支援を検討しています。基礎研修では、センター活動において「積極的に地域に向かう」、「住民と共に地域活動を展開」、「広報活動の充実」につながり、日常業務においては「根拠ある地域特性や課題、強みが見える」、「説得力がある説明と活動の広がり」といった変化が抽出されました。また、センター職員自身は「活動方法が具体的に変わった」、「センター活動に意欲的になった」ということを感じるようになっていました。

しかしながら、多忙なセンターで活動の中に地域診断を取り入れるにはまだまだ課題がありました。より活動に取り入れやすくするためにはどうすればよいか研究班で検討を重ねた結果、従来のシステムを見直し、新たなシステムを考案しました。今は新しいシステムの試行と評価に取り組んでいます。本研究は地域の皆さんと直接かかわるものではないですが、この活動と評価を通じて、センターが地域に寄り添ったきめ細かな地域活動を行っていきけるよう尽力していきたいと思っています。



あんしんすこやかセンター
地域診断研修会

活動予定

10・11月

10月3日(火)

コラボ教育 基礎看護技術演習Ⅰ
「睡眠を見直そう」
場所：神戸市看護大学

10月14日(土)

COC+合同報告会
場所：生田文化会館

11月25日(土) 市民公開講座

場所：神戸市看護大学ホール
(参加無料/定員500名)

2・3月

2月9日、2月13～23日

コラボ教育
健康生活支援学実習
場所：西区・須磨区内

12・1月

12月19日(火)

コラボ教育
ヘルスプロモーション論
場所：ユニティ

1月27日(土)

COC フォーラム
場所：神戸市看護大学ホール
(参加無料/定員500名)

各催事の参加申込みについては、地域連携教育・研究センターまでご連絡ください

お知らせ

10月から2月にかけて、地域住民のみなさまのご協力を得ながら学ぶコラボ教育が予定されています。生活経験が少ない現代の学生にとって、地域住民の方から生活や健康への考え方など直接お話を聞かせていただく貴重な学びの機会となっております。どうぞよろしく願いいたします。11月の市民公開講座では、高知大学でCOC事業に取り組む先生や学生をお招きし、学部教育と地域貢献の一体化を目指したCOC事業を報告し合い、その展望について地域住民、学生、教員による意見交換を行う予定です。1月のCOCフォーラムでは地域連携と大学教育のあり方についてのディスカッションをおこない、本学のCOC事業の5年間を振り返る企画を予定しております。多くのみなさまのご参加をお待ちしております。

COC編集部門のつぶやき

最近は空前的猫ブームです。私も猫派で、人間に媚びないところに魅力を感じます。時々、大学近くの公園で猫に会い、猫語(と私は思っていますが)で話しかけていますが、たまに返事をしてくれるだけでいつも不思議そうに見つめられます。一方、犬は嗅覚がすばらしく、病院勤務時には、行方不明になった認知症患者さんを警察犬があつという間に発見してくれたことがあり、常時病院に警察犬がいてくれればいいのにと医療従事者間で話したことがあります。犬や猫など動物のもつ愛らしさは癒しの効果があり、アニマルセラピー活動が広がっています。しかし、やはり看護師さんの笑顔と言葉は患者さんにとって一番の癒しになります。卒業後、多くの人々に癒しを感じてもらえる人になるためには、看護の勉強はもちろん重要ですが、1年生でのいろんな選択科目の勉学も知識の幅をひろげ、広い視野をもった人になるために必要だと実感しています。また地域の方々との交流は、学生の成長に大切なものです。学生たちが卒業後に地域の人々に癒しをお返しできればと思っています。

(COC編集部門・TT)

発行所：  神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地 TEL：078(794)8048

問い合わせ先：kangococ@tr.kobe-ccn.ac.jp

平成29年度 第331号(広報印刷物規格 A-6類)



市看×いちかん ちいき通信

2018年春・最終号

2018年3月10日 発行

いちかん…神戸市看護大学の略称「市看」

「(い)っしょに(ち)いきづくりについて(かん)がえる」をコンセプトにしています。

今号の内容



P1 ・コミュニティケアの拠点の未来像
・COCコラボ教育ピックアップ

P2～3 COCフォーラム

- ・地域の顔
(第6回COC運営会議録から)
- ・地域づくり・健康づくり
(NPO法人コミュニティかりば
専務理事 佐野正明さん)
- ・コラボ教育での学び
(看護学ゼミナール)
- ・COC研究ひろば 第10回
(地域連携教育・研究センター
運営委員長 石原逸子)

P4 活動の思い出
COC事務局からひとこと

コミュニティケアの拠点の未来像

神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター 准教授 相原洋子

健康日本21というのをご存知でしょうか。国民の健康づくり運動のための基本方針として、昭和53年から策定されており、現在の「健康日本21(第2次)」は第4次となります。この健康日本21は細かい目標項目を定め、それが達成できたか出来ないかを分かりやすく示しています。例えば「健康を支え、守るための社会環境の整備」については、「健康づくりを目的とした活動に主体的に関わっている国民の割合が、2022年度までに25%になる」と具体的な数値目標を掲げ、10年後どのような姿になっていれば、健康づくりが進んだといえるかを見ているのです。さて、COC事業でも取り組みの評価を行なうにあたり、学生、住民、教員を対象としたアンケート結果をもとに、割合の変化など毎年数字とにらめっこしていました。しかし数字はあくまでアウトプットであり、「全卒業生が地域住民の暮らしを理解でき

るようになる」というCOC事業全体のアウトカムが見えませんでした。外部の評価委員からもアウトカムの見えにくさの指摘をいただきながら、評価の見える化は事業担当をして最も苦心してきたことです。「地域住民の暮らしを理解し、看護実践に役立つようになるのは、実際には卒業してからがスタートだし」と自分に言い訳をしつつ、COC事業科目を受けた学生の皆さんが、卒後いつか地域で学んだことが役立ったと思いついてくれればいいなと思います。

さて、本誌をもって最終号となります。ニュースレターは最終号ですが、COC事業は今後、神戸大学を中心としたCOC+事業として2019年度まで続きます。地域のコミュニティケアの拠点として、本学がこれからも地域住民のみなさんと共に「健康づくり」に取り組んでいければと願っています。

COCコラボ教育ピックアップ ～健康生活支援学実習～

健康生活支援学実習は、2年生が住民(教育ボランティア)の生活の場に出向き、インタビューや地区探索をおこない、五感を通して地域に住む人々の暮らしの様子やその多様性を学びます。学生たちは、実習の2週間を通して、その地域の社会資源や住民同士の関係性、地域の課題など自分の住む地域よりも深く知ることになり、その地域や出会った方がより近い存在になってゆくようです。このように生活される様子を見せていただいたり、その方の考え方や人生史を聴かせていただくことは、家族以外の人との交流が少なくなっている現代の学生にとってとても貴重であり、人生の先輩としても多くのことを教えていただいています。次に控える病棟実習では、疾患だけに目を向けるのではなく、その人のこれまでの生活と退院後の生活をイメージしながら、その人らしさを大切に病棟での看護へと学びをつなげてゆきます。

(神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター助教 小巻京子)

地域の顔

～ 4年間のコラボ教育を振り返って

—第6回COC運営会議録から—

COC事業では毎年度の活動の評価として、須磨区竜が台地区、菅の台地区の民生委員会会長様、副会長様と連携自治体の北須磨支所保健センターとの意見交換を行う、「運営会議」を開催しています。去る12月20日に最終回の会議を開催しました。今回はCOC事業の継続について、2018年度からどのようにしていくか大学と地域、自治体と合意をとることを目的に開催しました。意見の中で大学として真摯に考えていけないといけないと感じた内容について、以下ピックアップします。

- ・ 学生はヘルスインタビューという形で入っているけれども、学生の目標はこの科目に出て単位をとることであり、インタビューに応じてくれる住民は自分の健康、生活を知ってほしいという思いで語っている。住民と学生との目標の乖離があったように感じた。できればインタビューを通して、対象者に関心を持ち、例えば「2ヶ月後にもう一度どのように過ごされているか来ますね」と、その人を追跡していくと住民ももっと健康を意識していくかもしれない。
- ・ 市民公開講座では、COC事業を実施している他大学他学部の学生が話しをしにきてくれたのに、看護大学の学生はほとんど参加しておらず、がっかりした。もっと学生が積極的に参加するよう仕掛ける必要があったのではないかと。



2017年度COC 市民公開講座

須磨区民生委員会会長さん、卒業生、学生(本学、高知大学)によるトークセッション

本学のCOC事業では地域連携教育を目玉として行なってきました。学生の真面目な態度に地域住民の方は好印象を持ってきており、若い人が出向いてくれると地域も元気になる、という言葉もいただいています。4年間、地域連携教育を行ってきて、大学が学んだことをもとに学生が地域に関心を持ち主体的に参加できる仕組みについて考えていけるようになってほしいです。(聞き手 地域連携教育・研究センター准教授 相原洋子)

地域づくり・健康づくり

～オールドニュータウン(狩場台・糀台)におけるNPOの活動～

NPO 法人コミュニティかりば 専務理事 佐野正明

「NPO法人コミュニティかりば」は「安心して住み続けられる地域づくり」をミッションとして活動し、地域に必要とされ当NPOにできることを一つ一つ実現しています。

まず、近隣センター「かりばプラザ」の空き店舗において「訪問者の休憩所・地域住民の居場所」(月1,000人訪問)を運営するとともに地域の方々の手作り品などを預かり販売する「フリマボックス」(月15万円売上げ)を運営し、出品する方々の生きがいづくりに役立っています。次に、高齢化に伴う生活上の「お困りごとサポート」(電球の交換・庭の手入れ・重い荷物の移動など年間100件ほど)を地域サポーターが有償で行っています。

一昨年6月からは、「かりばプラザ」広場で、毎週火曜日の朝9:00～9:45、地域住民の美容健康と介護予防、交流の場づくりのため「健康太極拳」を催しています。専門インストラクターによる本格的なもので毎回50～60人が参加する地域行事になってきています。「帰りの足が軽いよ」「体調が良くなった」などの声もたくさん寄せられており、来年度は「健康ストレッチ」のメニューも追加しようと検討を始めているところです。

団塊の世代中心の子育て世代がいつか住宅を求めたニュータウンの当地域では、想像を超えた急激な高齢化・少子化が進み、2025年には高齢化率(65歳以上)が50%を超えます。団塊の世代すべてが後期高齢者となり超高齢化社会に突入するため、医療・介護・福祉改革「地域包括ケアシステム」を進めるという「2025年問題」まであと数年です。当NPOも今後「地域包括ケアシステム」の一翼を何らかの形で担わざるを得ないと考え勉強を始めています。その意味で市看のCOC事業に大きな期待をしているところです。



「コミュニティかりば」が行っている健康太極拳の様子

「コラボ教育での学び

～地域での学びが看護実践にどう活かされたか：学生のまとめから～

前号となるちいき通信2017春号「コラボ教育での学び」で報告した「看護学ゼミナール」(4年生、選択科目)での活動を今回も報告します。10月に行った最終ゼミでは、1年次から4年次までCOC事業科目を受講してきた4年生に、①「コラボ教育が実習での看護実践にどのように活かされたか」、②「多職種との連携が看護を実践する自分にとって持つ意味」、③「COC事業科目のよかった点・改善してほしい点」の3つをテーマに、グループに分かれ学生間でディスカッションし、KJ法でまとめてもらう作業をしました。本誌では①のテーマについて報告します。なお詳細については、COC事業実績報告冊子第5号をご覧ください。活かされた内容は、「健康観」「退院支援」「地域活動」「生活者」の4つの点にまとめられました。

健康観：健康に対する価値観が多様であること、1人1人にとって地域で暮らすことの意味

退院支援：地域での暮らしをイメージした退院支援、地域の特徴を知ることは退院支援においても重要

地域活動：地域包括支援センターの働きを理解、民生委員、ボランティアが地域の健康を維持・増進

生活者：入院患者を生活者として考える、対象者の背景を知る

今年8月に行った本学卒業生(平成21～28年度卒)を対象としたアンケート調査でも、教育ボランティア導入授業が現在の看護実践に役立っていると回答した割合は8割となっていました。地域住民の語り、地域での演習は、生活者を支える看護の役割を十分に認識させてくれる場となっていることがうかがえました。

(ゼミ担当教員 相原洋子・記)



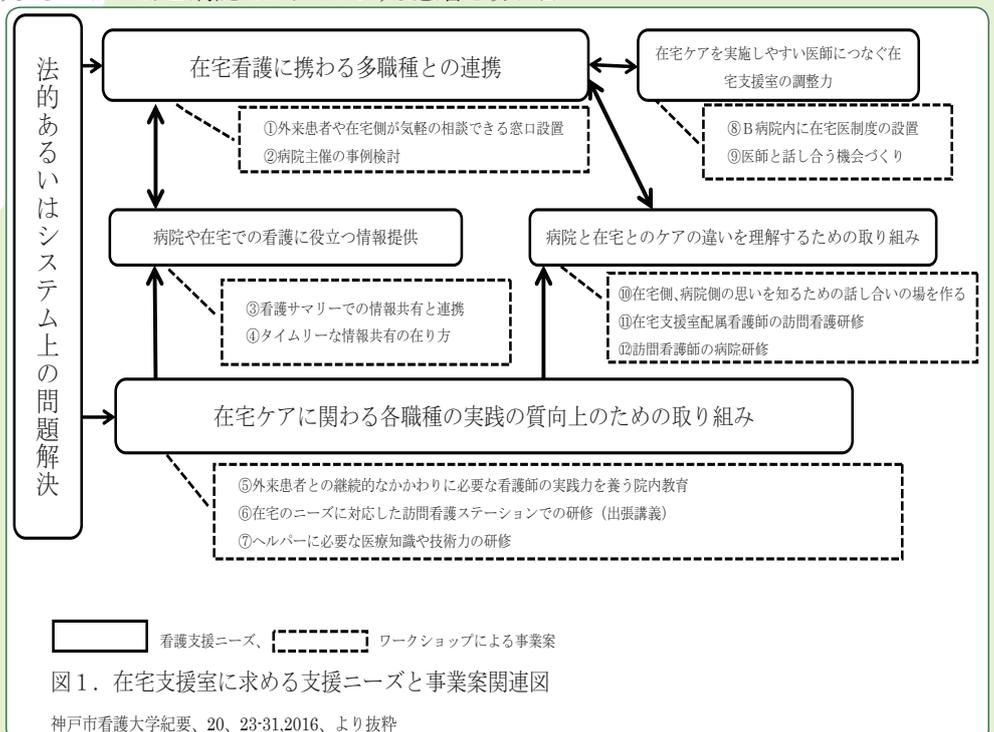
3 大学合同報告会プラットフォーム
ポスターセッション

「COC 研究ひろば 第10回

～中規模急性期病院における継続看護の実践力の強化～

神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター運営委員長 石原逸子

COCの共同研究を行っているB病院は、急性期中規模病院であり、市民の生命と健康を守るために、安全で質の高い医療提供を理念とし、地域の中核病院としての機能を担っています。近年、在院日数の短縮化や地域住民の高齢化に伴い医療依存度の高い高齢者が入院するケースが増えています。したがって、B病院では、このような患者を切れ目なく在宅医療につなぐ質の高い継続看護の提供が求められています。本研究は、B病院地の看護職の協力の下で、継続看護の推進を目的に共同研究を平成26年度より行っています。4年間の共同研究の結果、1. 医療側・在宅側関係者の連携に必要な研修の実施と情報の共有による実践の質を高める取り組みの必要性、2. 患者とその家族及び病院側医療関係者双方の社会資源の活用に関する認知度を高めること、3. 院内の看・看護連携について、看護師間での情報共有や地域医療在宅支援室、外来、病棟等の所属部所の違いによる個々の役割の違いを認識すること、4. 看護師間の連携を推進し継続看護を強化していくための看護管理職の対応やスタッフ教育の必要性などが明らかになりました。



活 動 の
思 い 出

2017年度の活動から

健康行動論 (5月9日)



健康学習論 (5月31日)



基礎看護技術演習 (10月3日)



市民公開講座 (11月25日)



ヘルスプロモーション論 (12月19日)



フォーラム (1月27日)



COC 事務局からひとこと



看護師を目指す本学の学生にとって、COC 事業を通して地域の皆様にインタビューをさせていただいたことは、かけがえない学びとなりました。おかげさまで、卒業し病院に勤務してからも、患者さんが入院される前にお元気であった時の生活に思いをはせることのできる看護師に育っているようです。大勢の学生を温かく受け入れてくださった地域の皆様に心からお礼を申し上げます。(M・O)

実際に大学の外に出て、地域で健康測定のお手伝いや受付をさせていただいた時に印象に残ったのは、学生さんと住民さんが世代を超えてとても楽しそうに笑顔で話している場面です。人は、話をする、話を聞いてもらえるということで自然に笑顔になるのだなと思いました。笑顔が繋ぐ地域づくりがもっと盛んになっていくといいなと思いました。(T・M)

市民公開講座(2017年11月25日開催)で伺った高知大学の学生さんのお話に感動しました。30キロ離れている住民さんに会いたくて、お休みの日でもバイクを走らせると聞き、そのエネルギッシュな人柄にもふれて嬉しくなりました。高齢化がすすむ中、若い人がいるだけで地域は活気つきますし、若い人が引っ張っていく地域づくりは必要だと思いました。(M・A)

COC編集部門のつぶやき

はじめて好きな人に誘われて会った16の時。大江の『万延元年のフットボール』を貸してくれた。プルストヤドストエフスキーも読んでいて、開高が肌に合うと言っていた。募る一方の想いが行き場をなくした儚い苦い恋だった。40年近くたって、三宮に向かう通勤電車でそのTと時々同じ車両に乗り合わせることがあった。気づいてないふりをして密かに楽しみにしていた。一昨年冬頃から、姿を見なくなった。電車から見えるTの名を冠したクリニックの明かりが消えていた。そのうち、芥川賞なんかもらっちゃたりして…と思っていたら、心筋梗塞で2年前に亡くなったと、昨日、風のたよりに聞いた。電車に乗り合わせることはもうない。一度ぐらい、目を合わせてみたらよかったな、と思う。

さて、COCニュースレターは、毎号、地域住民の方、行政の方、学生・教員の寄稿を紙面のフォーラムとして運営し、ベースカラーに季節を盛り込み、COC担当教員・事務担当者、私達COC編集部門の教員でお送りしてきました。最終号となる今号は、これからどんどん大きくなっていくパンダのシャンシャンにあやかり、笹の葉カラーを添えてお送りします。本学のCOC事業で根付いた各種事業が人々の関心を集め、学内外で発展していくことを祈念しています。これまでのご参加ご協力、本当に有り難うございました。(編集部門代表・SF)

発行所：  神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地 TEL：078 (794) 8048

問い合わせ先：kangococ@tr.kobe-ccn.ac.jp

平成29年度 第331号-2 (広報印刷物規格 A-6類)